

宋神道さんと共に裁判をたたかって

ヤン チンジャ
梁 澄子

今日、私に与えられた課題は、「宋神道さんとの出会い、支える会がどんな点に注意しながら裁判を共に闘ったのか」というものである。これについてはドキュメンタリー映画『オレの心は負けてない』と同名の書籍（樹花舎、2007年）の中で既に多くを語ってきたが、改めて映画や本の中では触れなかった、支援運動内部の議論、葛藤に焦点を当てて、この運動から得たものについて紹介してみたいと思う。

「女性としての宋さんの意識を変える」

これは、裁判が始まった当初、あるメンバーが会議の中で語った言葉である。

「宋さんは、女性として自分が被った被害についてきちんと認識できていない面がある。女性としての宋さんの意識の低さについては、私たちが教えて行くべきではないか」。

これほど明確な言葉として発せられたケースの他にも、とりわけ裁判が始まった当初、宋さんが示す様々な態度、例えば男性支援者に抱きついてキスをするとか、卑猥な踊りを踊る、といった態度に対して嫌悪感を示し、なんとかそれを止めさせようと宋さんに直接指摘して逆鱗に触れるという経験をしたメンバーもいる。

これらの支える側の意識、「宋さんを変える」という思い違いを問い直すことなしには、支援運動は成り立たなかった。

「慰安所」で性暴力の被害に遭った宋さんが、なぜ男性支援者に対して卑猥な表現をするのか。これを止めようとしたメンバーは宋さんから「おめえは若いから分からないだろうが、男はああいうのを喜ぶんだ！」と一喝されたという。

この言葉の中にこそ、宋さんの被害が如実に表れている。そのことに気づくまでには、そう多くの時間は要しなかったように記憶している。宋さんをありのまま認め、丸ごと受け入れる。それが日本軍「慰安婦」の被害の実態を知ることであり、人間不信に陥っている宋さんとの関係を結ぶ第一歩になるに違いない。そして、「私たちが宋さんから教わることはあっても、宋さんに教えられることなど何もない」という事実を認識して臨むこともまた、運動をしていく側がきちんと踏まえておかなければならないことだった。

私自身も、初めて宋さんに会った時には、「針の穴ほどの隙もない固い鎧で身を包んだ」ような、宋さんの他者を全く寄せ付けない雰囲気にとじろぎ、とても関係を結べそうにないという感想を持った。それは正直なところ、嫌悪感にも近いものだった。それが一変したのは、訴状を完成させるために、宋さんの証言を再確認しに一人で訪ねた日のことだった。その日、宋さんはほとぼしるように証言を繰り返出し、私が確認すべき点を全て聞き終えた後も、語ることを止め

ようとしなかった。夜がふけ、もう寝ようと布団に入った後も、宋さんの語りは止むことがなく、そんな宋さんが可哀想になって、私は本能的に宋さんの背中をさすった。すると、宋さんは「ふっ」と笑って、次の瞬間「すっ」と寝入ってしまったのである。この時、私は宋さんの語りを黙って聞き、宋さんが丸ごと自分を表現できるよう何も言わずに受け入れる存在がまずは必要なのだと感じた。以来、私は宋さんにとってそんな存在になりたいと思って運動に臨んできたつもりだ。また、7年間の慰安所生活と半世紀に及ぶ「在日」生活の中で、人々から無視され差別されてきた分、一層研ぎ澄まされた宋さんの洞察力と類い希な表現力から、私たちは実際に多くのことに気づかされ、多くのことを学んできた。

「宋さんは日本人男性にインタビューされるのは嫌でしょ？」

これは、宋さんにインタビューを申し込んできた在日朝鮮人女性の言葉である。

「誰が行くかは決まっていないが、日本人男性、特に年配の人だと兵士を連想させて嫌だと思うから、女性を行かせるつもりだ」。

これに対して私は、「宋さんは日本人男性でも、特に戦争体験のあるような人だと却っていいみたいなんだけど」と答えた。

宋さんにとって、元日本兵は「自分の証言が嘘ではない」ことを証明してくれる存在で、証言集会などでも会場に年配の男性がいるかをまず確かめ、「よかった、あんたみたいな人がいるとオレの言ってることが嘘じゃないって分かってもらえる」と胸をなでおろした。それほど、初期の宋さんは、人前では強がりながらも、証言を信じてもらえるかどうか不安を抱えていた。結局は、証言集会の度に人々が信じてくれることを何度も、何度も確認して被害回復していくことになるのだが。

この在日朝鮮人女性の問いは、一般に日本軍「慰安婦」に持たれていた「イメージ」、または「こうあって欲しい」「こうあるべきだ」という「イメージ」の一例である。

そのような「イメージ」を抱いて集会に来て、宋さんが軍歌を歌う様子に衝撃を受け、それをそのまま歌わせている支える会に憤慨して帰って行く人も1人や2人ではなかった。宋さんをありのまま直視することが日本軍の「慰安婦」制度とその下で被害を負った女性たちの被害の実相を理解する第一歩であり、丸ごと受け入れることが被害回復を手助けする第一歩に違いないと信じて臨んでいた支える会は、宋さんの軍歌を止めようとは考えなかった（もちろん、初期には支える会の中にも抵抗、異論はあった）。

戦後50年経ってなお軍歌を歌う宋さんも、男性に卑猥な態度をとる宋さんも、慰安所で「生きるすべ」として叩き込まれたものを、払拭する機会も得られずにそのまま抱えてきたことを示しており、それはとりもなおさず被害が回復されずに続いていることを示していた。私たちはそこから目をそらして「慰安婦」被害者を支援することも、この問題を解決することもできないと考えたのである。

宋さんは、男性に対して過剰なサービスをしながら、一方で「女は泊まってもいいが、男は絶対にだめだ」といった過剰な反応も示した。そのような過剰な「サービス」も、「反応」も、今では姿を消している（卑猥な踊りや軍歌は今も明るく元気にやっているが）。

私たちの運動は「知り得ない」ということを「知る」ことから始まった。

「裁判に関わった当初、同じ在日朝鮮人女性として、私自身がこの国で感じてきた生き難さと共通したものが、何かあるのではないかと思っていた。しかし、国家による重大人権侵害の被害者が抱える闇は、通常の体験しかしたことの無い者には、到底知り得ないものであることを知った。私たちの運動は「知り得ない」ということを「知る」ことから始まった。到底『知り得ない』その闇の深さを認識しつつ、知ろうとする努力を怠らないこと、宋さんの意思を尊重し、宋さんを運動に利用することを自らにも、他者にも、決して許さないことを固く心に決めて臨んできた」（梁澄子「宋さんと支える会の10年」『オレの心は負けてない』樹花舎、2007年）。

「代表なし、事務所なし、専従活動家なし」の「ないない三原則」を貫いた支える会は、あらゆることを担当制で行った。会計担当や会報担当がいるように、「宋さん担当」がいた。メンバーは5人。私もその1人だった。5人は集まると「なぜ宋さんはあんなことを言うのか」「なぜ宋さんはこんなことをするのか」と宋さんの示す「疑い」や「試し」「怒り」などについて報告し、分析し、対策を語り合った。

5人の中でも、その時々メインで宋さんと連絡をとる係がいて、最初のメイン担当が「倒れた」（挫折した）のは裁判が始まって程なくのことだった。次にメイン担当になった者も、とても続けられなくなり悲鳴を上げた。メインから外れることを勧めて、3人目ではほぼ落ち着いた、というのが実態である。この頃には5人総掛かり体制が整ったと言うべきだろうか。とりわけ裁判開始から4、5年の間は、宋さんの側は疑念を払拭できず、支える会の側はどう対処すればいいのか分からず、ぶつかることもあれば、怒られたり、疑われたり、試されたりして泣くことも多かった。

私自身は、本音の部分で裁判が早く終わることを願っていた。ある日突然終われば解放される、そんなことを度々思ったものだ。それが「宋さんとの関係が面白い、裁判をやって良かった」と思えるまでになっていく。宋さんも「裁判やってよかった。おめえらを一番信用している」と言ってくれるようになった。いつがその画期だったのか、記憶は定かでないが、映画『オレの心は負けてない』の素材になったビデオを撮り始めた頃、裁判開始からちょうど5年目あたりが、互いに変わり始めた時だったように思う。その後、宋さんは周囲を気遣うようになり、心を許してくれるようになり、飛躍的に被害回復の道を歩んでいく。そのため映画は、人々に人間の尊厳とは何かを示し、希望を与えるものになっていると思う。

このように宋さんが、そして私たちが変化する過程で、支える会が最も重要なこととして会得していったことが、「国家による重大人権侵害の被害者が抱える闇は、通常の体験しかしたことの無い者には、到底知り得ない」ということだった。証言を聞き、当時の状況の一端を明らかにすることができたとしても、そこで受けた傷が未だに宋さんをどのように縛り付けているのか、それはどんなに心を砕き、議論をしても、私たちには手の届かない暗い闇の奥にあるということが分かった。そのことに苛立つのではなく、その事実を受け入れる、つまり「『知り得ない』ということ」を『知る』ことから「私たちの運動は」始まったのである。「到底『知り得ない』その闇の深さを認識しつつ、知ろうとする努力を怠らないこと」が運動であり、それは

どこまで続けても「分かる」という境地には至らないものであることを認識していなければ、日本軍「慰安婦」被害者に対する支援活動はできないと思う。

これは、当然ながら、在日の慰安婦裁判を支える会だけの問題ではない。

韓国、台湾、フィリピン……。各国で同じような悩みを抱え、支える側も傷つきながら運動が続けられてきたに違いない。

「私たちは、たった1人の当事者を支えるだけでこんなに大変なのに、韓国の挺対協はこんなにたくさんの被害者を抱えて、こんなに少ない人数で、どうやって運動を続けて来られたのか」と尋ねた時、現在は代表になっている尹美香は、自身が幹事（事務局員）だった当時、「疑念」にかられたハルモニたちから「検察に告発された」話をしてくれた。これに傷ついた尹美香はその時、挺対協を辞めたが、数年後にまた戻り、現在も日本軍「慰安婦」問題解決のため最前端で活動をしている。そんな話を交わしながら、当時病床にあった朴頭里ハルモニや、他にも数人のハルモニたちの家を共に訪ねた。尹美香代表を出迎えるハルモニたちの様子から、その後の長い歳月をかけて挺対協と被害者たちの間で強い信頼関係が培われてきたことが伺われた。

今後に向けて

日本軍「慰安婦」問題の立法解決を目指して、2010年2月に「日本軍『慰安婦』問題解決全国行動2010」が結成され、1年間、様々な取り組みが行われた。

- 5月13日 韓国から吉元玉ハルモニ、挺対協の尹美香代表、そして自由先進党の朴宣映議員が参加して院内集会「被害者は待てない、償いの時を逃すな！」開催
- 6月～7月 参議院選挙に向けて、候補者と政党に対するアンケートを実施
14政党および全候補者438人中387人に送付、110人から回答
7月6日付けでプレスリリース発表
- 8月6日 「慰安婦」問題解決へのメッセージを「首相談話」に盛り込むよう要請書提出
- 11月25日 日本・韓国及び国際署名提出行動・院内集会
韓国から民主党の李美卿議員が来日、議員署名277筆提出
院内集会には370人が参加

しかし、期待された政権交代だが、日本軍「慰安婦」問題の立法解決は未だ展望が開けていない。

このような中、一方で私たちは、私たちが20年かけて手にした果実を確かなものにし、これを伝える活動に一層の力を入れるべきだと考える。

宋さんや「慰安婦」被害者の体験は被害者自身のもので、それは、共に笑い、泣き、怒り、互いに傷つけあい、励まし合って来た私たちであっても、決して共有することのできない圧倒的な事実である。しかしこの20年間に、閉じこめていた記憶を人々の前に開示しながら、閉ざされていた心を少しずつ解きほぐして行った宋さんや他の被害者たち、自分自身を受け入れ、

他者を受け入れ、社会との関係を少しずつ結んでいった姿を、傍らでつぶさに目撃したこと、それは私たち自身の体験だ。

「私が死んでも、ここにいる若い人たちが私の遺志を継いでくれる」と信じて逝った姜徳景さんの信頼に応え、「裁判に負けても、オレの心は負けてない」と語った宋さんの「変化」や、「国際人権活動家になった」吉元玉さんの「願い」を、多くの人々に伝えることが、今、そしてこれからの私たちに課せられた重要な課題だと考える。

